

構図を考える

2021年8月

加藤辰彦（昭和46年卒）

フォト・コラムを立ち上げて、最初が「偶然と必然」という若干変則的なテーマを選びましたが、本来であればこの「構図を考える」が最初に来るテーマだと思います。それくらい重要なテーマです。

構図はフレーミングとも言いまして画面構成のことです。手法にはいろいろなものがありますが、最も代表的なものが三分割法だと思います。私は趣味として写真を撮影するようになって50年程が経過するのですが、真っ先に習得したのがこの三分割法です。この手法を意識して写真を撮ると、程々に様になった写真を撮ることができます。ただし、意識しすぎると弊害もあります。

このテーマ2では三分割法を中心に構図の手法をご紹介します。さらに三分割法の反証（三分割法に沿っていないけど魅力的な写真）の事例を取り上げ、それらをもとに構図の手法をどのように活用するかの提案をします。

1. 三分割法と日の丸写真について

まず、構図の代表的な手法「三分割法」について簡単に説明します。

三分割法とは、画面を縦横それぞれ三分割してラインを引き、水平線や被写体のラインをこの線に近づける、又は主要な被写体をラインの交点（図中のa、b、c、d）に近づけるといいう手法です。

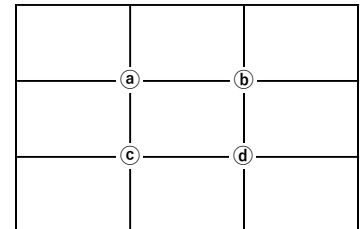


図1 三分割法の概念

なぜ三分割なのかについては、私自身も今もってはっきりとは判らないのですが、たしかに画面構成をこのようにすると収まりのいい場合が多いのは経験者として実感しています。

ここで、三分割法の事例を二つ挙げます。写真1と2はどちらも私が撮影しました隅田川での事例です。テーマの中心となるビルと風車が三分割のライン又は交点付近にほぼ配置されています。構図的には収まりの良い写真になっていると思います。

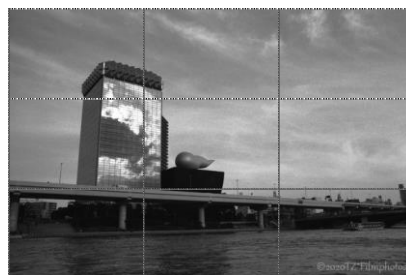


写真1 「ビルの中の夕暮れ」（隅田川、2014年6月14日）…アサヒビル本社ビルの位置が三分割のラインに乗っています。



写真2 「廻る風車」（隅田川、2016年12月24日）…風車の位置を三分割法の交点近くに持ってきています。

これに対して、主要な被写体を画面の真ん中にもってくる「日の丸構図」はやってはいけないこととして写真の入門書に紹介されていますし、先輩諸氏からもよく言われました。確かに真ん中にもってきて間の抜けた写真になることが多いように思います。

しかしながら、たまに「この写真、日の丸だけど悪くないんじゃない」と思うことも事実で、自分の感覚は変かな?…とってしまいます。特に、遙か昔のことなので詳細は忘れましたが、写真撮影の入門書に掲載されていた日の丸写真の悪い事例（女性のポートレート）が私には魅力的に思えてしょうがなかったことがありました。



図2 やってはいけないと言われる「日の丸構図」

【参考：三分割法以外の構図の手法について】

ここで、三分割法以外の手法についても参考までに事例を挙げて説明します。

写真3：スクエアフォーマット（真四角写真）の場合の日の丸写真

横長写真又は縦長写真の場合には日の丸写真はやってはいけないこととされていますが、スクエアフォーマットの場合は別です。むしろ積極的に撮影したいものを真ん中において主張を明確にする…ということはしばしば用いられる手法です。私自身もスクエアフォーマットは大好きなのでよく用います。

写真3は三浦海岸にある漁港の駐車場に置かれたトレーラを撮影したもので、ポツンとおかれたトレーラの車輪が後輪しかなく不安そうな様子が出ていて自分でも気に入った写真です。スクエアフォーマットでは日の丸写真がさまになる事例として挙げました。

写真4：縦長写真で被写体を真ん中に持ってきたもの

構図の手法というほどのものではないのですが、京浜港で撮影している際に、人口護岸の先端を撮ろうと思い、横長ではありふれているので縦長にして、あまりいろいろ考えずに真ん中付近に持ってきた…というものです。セオリーにとらわれずにいろいろやってみると、たまにいいものが撮れるという事例です。

写真5：スクエアフォーマットの上半分に被写体を配置したもの

これもセオリーにとらわれずに上半分の空間に山の影と早苗をドンと置いたものです。撮影時点（2006年6月11日）ではそれほど思い入れはなかったのですが、年月の経過とともにこの写真が好好きになってきました。



写真3 スクエア（真四角）で被写体を真ん中にもってきた事例。日の丸写真ですが、スクエアの場合はきれいに収まります。



写真4 縦長写真に護岸先端を真ん中にもってきたもの。



写真5 スクエア写真の上半分に被写体をもってきたもの。

2. 三分割法の反証（4例）

ここでは三分割法の反証として4例を挙げます。わかりやすく言いますと、やってはいけないと言われる日の丸写真の中でも魅力的なものがあります…という事例です。構図だけで割り切れるほど写真は単純ではありません。構図に拘り過ぎるとこのような素敵な写真を逃してしまいます。

【反証1：ソール・ライター氏のポートレート写真…魅力あふれる日の丸写真】

写真6はソール・ライター氏の作品をNHK2チャンネルの番組の放映中にテレビ画面を直接撮影したものです（天国のソール・ライター氏にご容赦願ひ、勉強用として引用させて頂きました）。画面を撮影したので歪んでいます、実際には横長の写真です。



ソール・ライター氏（1923～2013）は日本では無名に近かったのですが、亡くなったあとに開催された回顧展（2017年）以来注目され始めた写真家です。晩年の身近なものをテーマにした撮影スタイルに共感を持つフ

写真6 ソール・ライター氏の作品 妹さんのポートレート（NHK2チャンネル日曜美術館 2021年3月7日放映の番組（写真家ソール・ライター いつもの毎日で見つけた宝物）より掲載）・・・魅力あふれる日の丸写真

アンに支持されています。かく言う私もNHKの番組を見て初めて知り、偉大な写真家であることを認識しました。

この妹さん（デボラさん）をモデルにしたポートレートは、かなり若いころに撮影されたものですが、時代を超えて魅力にあふれています。私もテレビで見た瞬間に「ああ、いい写真だ」と直感しました。番組の中でも著名な写真評論家が、この写真についてソール・ライター氏のその頃の境遇とこの写真以降のデボラさんの不幸な人生を引用して、歴史的な予感を感じさせる一枚として絶賛していました。この写真、実物を見たことないですがぜひ一度見てみたいものです。

さて、この写真、構図的に見ると典型的な「日の丸写真」ですね。それでいて、番組で最初に見た時は、私はソール・ライターの事も知らなければもちろんデボラさんのことについての予備知識は全く無く、それでも直感的に「いい写真だ！」と思いました。写真評論家が言っている歴史的予感なんてものもなく、単なる一枚の写真として見ていい写真だと思ったのです。日の丸写真だけど魅力にあふれています。たぶん、三分割法を意識して妹さんの顔を横に（この場合は顔の向きから考えて右でしようけど）もってきたら雰囲気はだいぶ変わ

ってしまうと思います。

もう少し構図的に検証してみましょう。どこかの会場らしき広い空間の中で回りは結構暗い状態であり被写体人物の顔が白く浮き上がって見える。それを横長写真の中央に持つてくる。そして被写体人物の最高の表情を捉える、といった状況です。顔を写真中央にすることによって、被写体人物の最高の表情をゆったりとのびやかに目立たせている。このような構図でこれだけ魅力的なポートレートになる…と言うことはソール・ライター氏のこの写真以外にも世の中に日の丸構図の魅力あふれるポートレートの事例があるのではないかと、思いつつネット検索してみました。そうしましたら、意外に多く存在します。特にファッション系の写真に多いようです。そういえば、ソール・ライター氏は若い頃は売れっ子のファッション写真家だったとのことでした。

日の丸構図はやってはいけないものではなかったのです。

【反証2：入江泰吉氏の広目天像（写真7）】

次に、写真家入江泰吉氏の作品を引用させていただきます。写真7が作品「東大寺戒壇院広目天像」です（こちら天国の入江先生にご容赦願ひ、勉強用として引用させていただきました）。入江泰吉氏は、奈良大和路の風景、仏像、行事等を撮影した著名な写真家で、私は長年、入江先生のような写真が撮りたいといろいろ工夫を重ねてきました。入江先生の作品を穴のあくほどよく見て、いろいろ考えたものです。

遙か昔のことですが、この広目天像の写真を初めて見た時、ぞくりとするほどの生々しさにプロの仕事の凄みを感じるとともに、「ああ、やっぱり入江先生も三分割法で撮影されているんだ」と思いました。広目天像の眉間が三分割法の交点付近に位置しています。大写真家でも基本的に忠実なのだと思われ、それ以降、何年もの間この写真は三分割法構図によるものだと思っていました。

しかし、その後50歳を過ぎてからテーマを意識して撮影するようになってくると次第に考えが変わってきます。

テーマを意識するようになってからこの写真を見るのがあって、「あれっ?!」と思いました。広目天像の顔面の半分（こちらから見て左側）に強い光が当たり、なにかしら広目天像の強いエネルギーを感じます。以前はそんなことを考えたこともなかったのですが、よく見ると、広目天像の気合・エネルギーが写真の真ん中に写されているような気がしてきました。左の肩の上の漆黒の闇との対比が絶妙です。

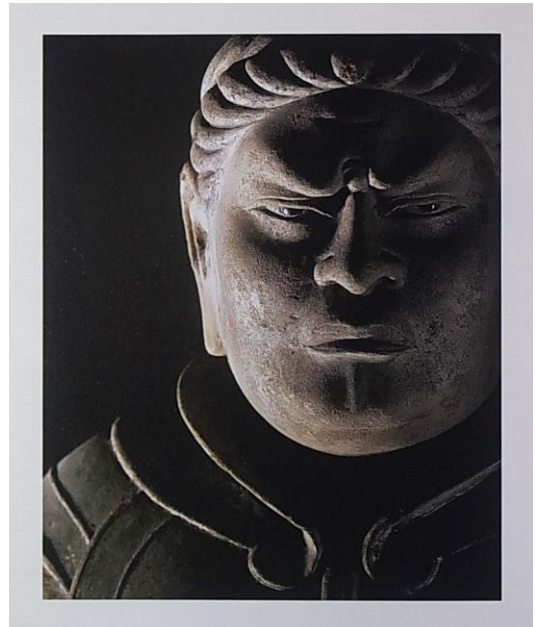


写真7 入江泰吉氏の作品「東大寺戒壇院広目天像」(入江泰吉の世界 やまと余情(奈良市写真美術館編 平成12年)より引用)・・・これは三分割法か？

よく考えてみると、入江先生ほどの大写真家が構図を整えるためだけに広目天像の顔面を横に振ったとは思えない、むしろ広目天像の光の当たる強い意志を感じる部分を画面の真ん中に据えた…という骨太な写真だったのです。つまりこの写真は実は日の丸写真だったんです。

もちろんこの横からの強い光は補助光なので、入江先生がこの写真の撮影の際にピントグラス（撮影は大判写真による）に逆さに結像した広目天像を見ている際にはこの横からの光はまだ発光していなくて、つまり薄暗い戒壇院建屋の中で補助光の発光を想像しながらの撮影であったと思うのですが、その補助光が当たった際にできる顔面の気合の塊を想定して画面のど真ん中にそれを置いたと言う骨太な写真と認識するようになりました。

【反証3：フォトギャラリーへの出品作品から（写真8）】

さて、反証3は先日のフォトギャラリーへの出品作品から構図について考えたいと思います。写真8は日比野さん撮影の「自由の女神」です。ご本人の承諾を得て掲載させて頂きました。寸評にも書かせて頂きましたが、構図的には日の丸写真です。しかし、この写真を最初に拝見して「ああ、いい写真だ！」と直感しました。自由を謳歌するアメリカの大きさを感じる伸びやかな写真です。また、幾多の犠牲を払い自由を勝ち取ったんだ…どうだまいったかという気迫も感じます。たぶん、日の丸構図にしないとこの感じは出てこないと思います。



写真8 日比野さん撮影の「自由の女神」（写真同好会フォトギャラリーへの出品作品より ご本人の承諾を得て掲載）

私、自分ではこのスケールの大きな写真を撮れないと思いました。自分が日比野さんと同じように移動する船上からの限られた時間の中で撮影する場合、多分次のように考えると思います。

- ・女神の足元の水面を入れるかどうか…入れよう。
- ・女神を真ん中に置くと日の丸写真になってしまうので縦構図にしよう。
- ・さらに女神像を真ん中にしないように女神像を端へ、トーチの位置から考えて女神像は右の端へおこう。

ということで、写真9のような写真を撮ってしまうでしょう。もちろん時間がたっぷりあれば日比野さん撮影のスケールの大きな写真も撮るかもしれませんが、移動中の船上撮影にそんな時間はないです。

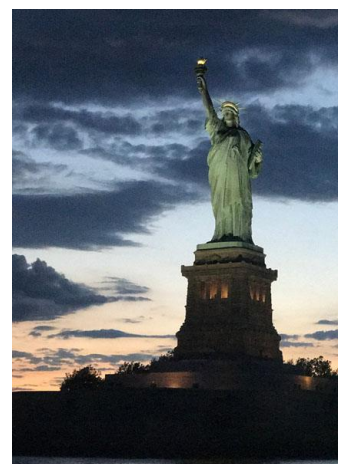


写真9 日比野さんコメント！勝手にトリミングしてしまいました

写真9は構図的には安定していると思いますが、空間的にせせこましくなってしまうもはや別物ですね。のびやかな夕焼けの空などはとらえていません。

構図にこだわるよりも、おおらかな気持ちで撮った方がいい結果が得られる、という事例です。

【反証4：自作の霞ヶ浦の事例（写真10、写真11）】

最後に自分で撮影した霞ヶ浦の事例です。

2018年5月5日のこどもの日、霞ヶ浦に撮影に行きました。この日持ち出したカメラはこの頃常用していたニコンF、レンズは定番の28mmF3.5 50mmF2 135mmF3.5の3本で、フィルムはモノクロのアクロス100。

この日の撮影中にふと水田方向を見ると、快晴の空にポツとした雲を見つけました。浮浪雲（はぐれぐも）です。すぐに撮ろうと思いましたがその時ニコンFにつけているのは28mm単焦点です。これだと地平線と雲が小さくなりすぎて日の丸写真になってしまいます。50mmレンズがベストですが雲の動きは速い、もたもたしていると雲の形が崩れてしまう。ええい！ ままよ！ 先人の教えの通り、とりあえず装着しているレンズで撮っちゃえ!! …として撮影したのが写真10です。地平線と雲が近寄っていて、ど真ん中ではないですが日の丸写真みたいです。

数分後、レンズを28mmから50mmの標準レンズにして撮影したのが写真11です。



写真10 とりあえず撮影したもの・構図的な配慮はない（2018年5月5日）…ニコンF、28mmF3.5、1/125s f16、アクロス、13時45分頃



写真11 構図的に納得して撮影したもの（2018年5月5日）…ニコンF、50mmF2、1/125s f16、アクロス、13時50分頃

ということで、撮影終了直後は写真 11 が会心の作だと思っていました。

ところが、今年（2021 年）になってはじめてスキャナで読み取りこのシーンをプリントすることになりましたが、プリントしたのを見ると考えが変わってきました。構図的には写真 11の方がまとまりはいいのですが、ポツンとした浮浪雲の感じは写真 10の方がいい…と思うようになりました。

みなさんはどう思われますか？

もちろん 28mm(広角レンズ)と 50mm(標準レンズ)の遠近感の差、雲の形の違い(50mmで撮った方は少し形が崩れています)などもありますが、なんとなくポツンとした浮浪雲の孤独な感じは写真 10の方があるような気がしています。

ここで、教訓が一つあります。この日、ズームレンズを装着していたら（私は持っていませんが）写真 10は撮れませんでしたね。すぐに構図的に安定している写真 11を撮影してそれで満足して終わり!! こう考えると、単焦点レンズは不便さの中にもメリットあり…ですね。

その後、写真 10をトリミング、ノイズ除去、明るさ調整などを行いまして改めてプリントし、写真 12のように A3 サイズに額装して身近において楽しんでいます。ただの雲の写真ですが不思議に癒されます。タイトルは「浮浪雲一片（はぐれぐもいっぺん）」です。



写真 12 A3 サイズに額装した「浮浪雲一片」

3. 市街地では構図にこだわった撮影が困難

テーマを構図としておきながら、この様な言い方をすると身も蓋もないのですが、市街地では被写体周辺に建物、木、電柱などの構造物が多すぎて自由に構図を創ることが困難なケースが多いと思います。隅田川周辺の撮影を始めてそう実感するようになりました。

アフリカの大草原でバオバブの木を撮影する時とかファッション写真家がスタジオ内でモデルさんを撮影する時などは納得のゆくまで構図にこだわることは可能でしょうが、隅田川周辺での風景写真の場合はそんな自由度はありません。ほとんどの場合、撮りたいものと撮りたくないものを識別するだけでフレーミングが決まってしまう。そして、撮影後、出来上がった写真を見て構図的にまとまりのよいものだけを選定しています。そのため、構図は撮れた写真を選定する際の考え方…と言い換えてもいいかと思います。

事例を挙げて説明します。

ここで写真1を再掲します。このテーマの冒頭で三分割法の事例として挙げました。しかしながら撮影時に構図的な配慮をしっかりと行ったわけではありません。正直なところ、夕焼けの映っているアサヒビール本社ビルの左隣に墨田区役所のビルがあり、画面内に入れたいので避けただけなのです。この場合、アサヒビール本社ビルに映り込んだ夕日を中心に撮ろうという考えが頭に浮かび、墨田区役所ビルが入るとそのテーマが弱くなってしまふと考え、必然的にこの構図になったのです。



写真1(再掲) 「ビルの中の夕暮れ」
実際の撮影では画面左にある墨田区役所のビルを避けて撮影した

目下のところ、市街地での私の撮影は、

【撮影時】・撮りたいものと撮りたくないものを識別する

・構図的な先入観を持たずに、可能な範囲でいろいろ撮っておく

【選定時】・撮りたいものが明確にわかるシーンの中から構図的に安定しているものを選定する

という方法を実践しています。

さて、市街地よりも自然度の高い郊外（霞ヶ浦など）の場合はどうなるのでしょうか。さすがに市街地よりも構図の手法を適用しやすいのですが、それでも、上記の撮りたいものと撮りたくないものを識別する手法は有効だと思っています。

4. それでは実際の撮影はどのようにやるか…撮影スタイルの提案

今回のテーマでは、三分割法を中心に構図の手法についてご説明しましたが、同時に三分割法に沿わない事例もご紹介しました。そして、やってはいけないと言われる日の丸写真にも魅力的なものもあり写真のよさというものは単純ではないことを確認しました。

それでは、実際の撮影時に、構図についてどう認識したらいいのか。以下の撮影スタイルを提案します。

●撮影時には構図に拘り過ぎない

- ・構図を意識すると役に立つこともありますが、拘り過ぎると素敵な写真を逃してしまうこともあります。
- ・そのため、撮影時には構図にこだわらずにドンドン撮っておきましょう。
- ・特に、これまでの自分なら絶対に撮らないという写真を毎回撮るように心がけましょう。新しい世界が広がります。
- ・(デジタルの場合)撮影直後のモニター確認はやめましょう。その時間があったら被写体をよく見ましょう。別な視点からさらにもう一枚撮った方がよい結果が得られます。

●撮影時には、撮りたいものと撮りたくないものを明確に識別する

- ・写真のテーマに直結します。まず「何を撮るか」が重要(テーマは構図より大事)です。
- ・ほとんどの場合、撮りたいものと撮りたくないものを識別するだけでフレーミングが決まってしまう。これは、市街地に限らず自然度の高い郊外でも当てはまります。
- ・識別した上で、時間の許す範囲でいろいろ撮っておきましょう。

●写真の選定時に初めて構図にこだわる

- ・家に帰って、たくさん撮った写真の中から選定する時に初めて構図にこだわらしましょう。
- ・構図的には変だけど、写っているものが魅力的で…という選定理由も大切です。

以 上